

浙江省歴史調査報告

宋代古墓を中心として（武義・天台山・寧波篇）

佐々木 愛

はじめに

2017年12月24日から28日にかけて、浙江省において宋代古墓およびそれに関連する史跡の現地調査を行った。本調査は、宋代古墓の調査をとおして当時の中国の家族やジェンダー構造を描きなおそうとする試みであり、さらには墓地の修復保存という側面から宋代中国についての歴

史認識の究明を目指すものである¹⁾。今回の調査は筆者のほか、大澤正昭・石川重雄（以上（公財）東洋文庫）、戸田裕司（常葉大学）、兼田信一郎（獨協学園中高）の5名で行い、小島浩之（東京大学経済学部）は日程調整がつかず不参加となった。

表 1. 旅程概要

日付	時刻	地 点
12/25(月) 武義・永康	8:25	宿舎[最佳西方世貿大酒店・金華市婺城区八一北街]出発
	9:25	潘竹澗墓・潘竹澗母(葉氏)墓・大通禪寺[白洋街道湖塘沿村]
	9:50	
	10:30	明招寺(明招文化園)
	11:35	
	11:40	呂祖謙家族墓
	12:05	
	13:45	愈源村
	14:00	
	16:05	烈婦祠
	16:10	
	17:10	陳亮墓
	17:55	
	20:40	(夕食・休憩)
	21:45	
21:55	宿舎[天台賓館・天台県天台山国清寺旁]	
12/26(火) 天台山	8:30	
	9:15	真覺寺(智者塔院)
	9:50	
	10:10	高明寺
	11:15	
	11:30	(昼食・休憩)
	12:30	
	12:35	国清寺
	14:30	
	14:35	仏教城(仏像製作・展示)
15:10		
18:05	宿舎[新園賓館・寧波市海曙区解放南路]	

日付	時刻	地 点
12/27(水) 寧波	9:00	宿舎[新園賓館・寧波市海曙区解放南路]
	9:10	明州市舶司・遠来駅旧址、三江口(奉化江・余姚江・甬江の結節点)
	10:00	
	10:30	宿舎[新園賓館]
	10:40	
	11:40	葉氏太君墓・無量寿寺
	12:25	
	13:25	史詔墓
	13:45	
	14:05	史彌遠墓・大慈寺
	14:55	
	15:25	史浩墓・史師仲墓
	15:40	
	16:00	南宋石刻公園・史漸墓
	16:30	
18:10	宿舎[新園賓館]	

※移動日である24日と28日については行程を省略した。往路24日は、成田空港および関西空港からそれぞれNH919便、JL891便にて上海浦東空港より入国。上海虹橋から高速鉄道G7365にて金華駅へ。復路の28日は、寧波駅から高速鉄道G7510にて上海虹橋駅へ。上海浦東空港へ移動し、成田行(NH960便)・関空行(JL898便)にてそれぞれ帰国した。

12月25日 武義県・永康県

潘竹澗墓（白洋街道湖塘沿村）

明人の墓であるが、主目的としていた呂祖謙墓へ向かう途中に位置していたこともあり参観した。潘希曾（号・竹澗、1467～1532）は、明の弘治15年（1502）に科挙登第、その後兵部左侍郎まで昇り、兵部尚書を追贈された明の高官であり、そのむすめは王守仁（陽明）の高弟・程文徳（1497～1559）に嫁いでいる。

さて、この墓に我々が着目した理由は、『中国文物地図集・浙江分冊』²⁾（以下『文物地図』と略）において、本人の墓の側に母葉氏の墓があると記載されていたことである。滋賀秀三『中国家族法の原理』³⁾（以下滋賀『家族法』と略）では、夫婦は合葬されるのが原則とされているが、我々のこれまでの調査においては、夫婦別葬で個人単位で墓が作られるケースが圧倒的に多く、さらに妻ではなく母との関係が密接な事例もみられたことから⁴⁾、本墓はこの類例となることが想定されたのである。夫婦を別葬し、母子を合葬するという形は、滋賀『家族法』とは真っ向から対立する墓葬法ということになる。

しかし現地を訪ねたところ、墓本体はすでに破壊されており、わずかな石組などがその名残をとどめるばかりで、潘竹澗墓も母葉氏墓も特定できなかった。ただし高さ3.5メートルという威容を誇る石刻文臣をはじめ、石馬、石羊、石虎、および亀趺碑については見事に残っており、それらの石刻は1987年に武義県文物保護単位に指定されていた⁵⁾。なお亀趺石碑の碑文は摩耗剥落により判読不能だった。また、墓の左手には大通禪寺がある。唐代創建の古刹とのことであったが、伽藍の建築物はすべて最近になって建てられた真新しいものであった。中国の経済発展が片田舎の仏寺にまで及んでいることをあらためて認識する。

明招寺（白洋街道下陳村）

阮籍の曾孫・阮孚の隠居所であった建物が、その死後東晋咸和初年（326）に寺とされたことに始まる古刹である。この寺も本堂を始めとして全面的な整備工事が進行中で、本堂も新築されたばかりという趣だった。かつての明招寺は、建物は崩れ落ち荒涼とした景観であったそうだが、観光地化をはかる武義県政府の主導により、2004年から修復が進められたという⁶⁾。墓という点でいえば、本堂の右手には新修された阮孚の墓があり、また本堂裏手の山には当地出身の官僚・朱若功（1667～1736）とその夫人の合葬墓もあった。また、時間の関係上こちらは参観できなかったが、境内地図によれば、中国仏教史上高名な唐末五代の禅僧・徳講禅師の墓もあるとのことである。徳講禅師は本寺で40年にわたり仏法を講じている。

ただ近年、当地で「明招文化」と銘打って喧伝されているのは、六朝・阮孚というよりは、そしてましてや徳講禅師の禅文化では全くなく、なんといっても朱熹の盟友・呂祖謙（1137～1181）の明招寺における講学活動である⁷⁾。明招寺のある明招山麓には呂氏の家族墓があり、明招寺は呂氏の墳寺⁸⁾であった。呂祖謙は金華に居住し、金華学派の祖といわれるが、ここ明招山にて父母それぞれに対し3年ずつ、計6年に及ぶ殯の日々を過ごし、この地で朱熹らとともに講学活動を行っていたのである。

境内の左手の明招講院には、「明招文化園」の名で、呂祖謙の人生や学問とその講学活動、および後世に武義が輩出した人々を紹介・顕彰する展示が行われていた。また明招山で出土した墓誌や墓石が展示されていた。呂祖謙家族墓からの遺物もあり、呂祖謙の弟・呂祖俊や二従兄弟・呂祖恣の墓誌、「太師呂好問公之墓」と記した墓石もみられた。ただし墓誌はガラス製の展示ケースで覆

われており、日光が反射して撮影は断念せざるを得なかった。

呂祖謙家族墓地（明招寺近く）

朱熹の盟友であり姻戚でもある呂祖謙（1137～1181）は、河南呂氏すなわち呂蒙正・呂夷簡・呂公著と北宋期の三人の宰相を筆頭に、多くの官僚を輩出した、北宋の名族中の名族の出身である⁹⁾。図1に略系図をあげた¹⁰⁾。本墓地は、呂祖謙からみて曾祖父にあたる呂好問（1064～1131）にはじまり、呂祖謙の子の世代に至る五代の族人が葬られている家族墓である。本墓の被葬者数は96名に達するともいわれる¹¹⁾。

このような大規模な族葬形態は南方においては稀なものといえよう。我々はこれまで浙江・江西・福建で現地調査をしてきたが、これら南方では墓は個人個人でそれぞれ別に作られていることが多く、家族成員の墓どうしが村や県、時には省を超える広い範囲に点在していた¹²⁾。

しかし北方では家族一族の成員全員を一つの土地に葬る族葬の形態が広くみられており¹³⁾、北方と南方では墓葬形態が異なっている。

北宋の時代、呂氏は河南鄭州神崧に家族墓地をもっており、呂希哲より上の7世代にわたる族人は、この鄭州神崧の墓地に葬られている¹⁴⁾。そして両宋交代に伴い南遷した呂氏一族は、北方の習慣そのままに南方にて家族墓を形成したということなのであろう。

呂氏は、一族がともに葬られるべきだという観念を非常に強固に持っていたと考えられる。なぜなら著しい遠方で死去した者もこの地まで遷葬・移葬されているからである。

最も遠地から遷葬されたのは呂好問である。呂好問は南宋当初尚書右丞にまで登ったが、靖康の変当時の行動を問われて失脚、桂林まで逃げ、桂林で1131年に死去し桂林で埋葬され、のち1154

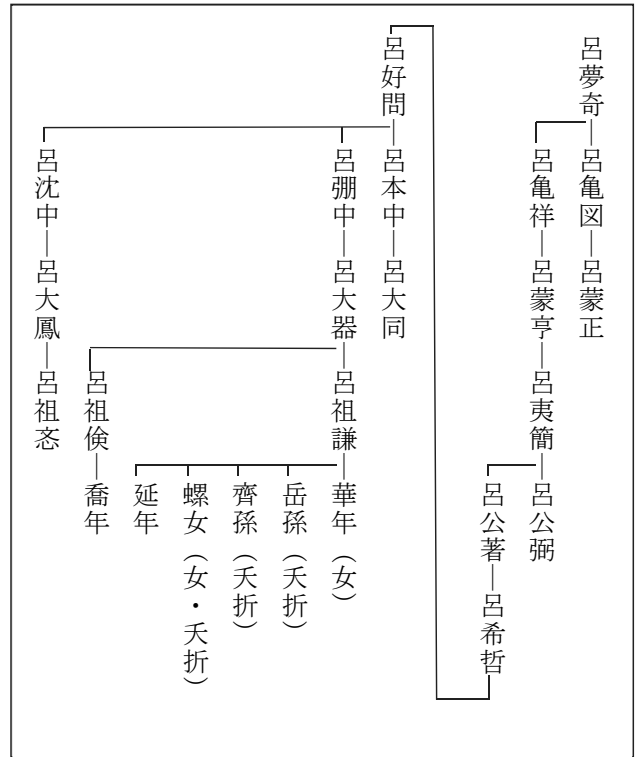


図1 呂氏略系図

年になってこの明招山まで遷葬された。また呂公間の四人の子も宋の南渡に伴って南遷し、それぞれ南方の各地に定住していった。呂本中は上虞、呂弼中は金華、呂用中は紹興、呂成中は衢州開化付近に。しかしこれら一族の人々も、死後はみな明招山に移葬されたのである¹⁵⁾。

北方に出自する彼らにとって、武義明招山は故郷ですらなかった。にもかかわらず、時に千キロ以上もの道のりを越えて、柩がこの地まで運ばれ埋葬されていたのである。このような大事業をあえて行うということから、呂氏の族葬へのこだわりがいかに強固であったかをうかがい知ることができる。

さて明招寺からほど近い呂祖謙家族墓地であるが、『文物地図』には、「呂祖謙の墓の他、親族の墳墓が十数あり、呂好問、呂本中、呂在器、呂祖儉の墓は特定できる」と記載されていた。実際に現地に行ったところ、呂祖謙の墓についてはすぐに分かった。明招寺から通じている道から最

も近く、参拝に便利な位置に呂祖謙の墓はあったからである。山の傾斜を利用した三層の拝壇も持ち、多数の族人が墓祭できるしつらえで、比較的景色も良い。次いで他の家族の墓を見るべく山内を搜索したが、墓ではないかと思われる跡はいくつか目にするには出来たものの、墓碑や案内板など被葬者を明示するものはなかった。

実際、現地を見ての率直な感想は、呂祖謙の墓は本当にこれなのだろうか、というものであった。呂祖謙が死去した時点では、呂好問以下多くの長輩の族人がすでに埋葬されていたのであり、幼輩の呂祖謙が最も良い場所に葬られていることに違和感があったのである。

帰国後、浙江文物考古研究所の鄭嘉励氏の呂祖謙家族墓地に関する 2 本の論考を比較参照することができた。2013 年発表の論文¹⁶⁾と、2015 年発表の論文¹⁷⁾である。この 2 本の論文は、呂祖謙とその家族墓の被葬者に対する氏の見解が、わずか 2 年で大きく変化したことを示している。

2013 年の論文には「呂祖謙家族墓地保護範囲図」という図が掲載されており、地形図に呂祖謙を含む 11 人の呂氏の墓の地点が書き込まれている。2013 年は呂祖謙家族墓地が全国重点文物保护单位となった年であり、かつ行論上特に関係ない保護範囲を示すラインも記入されていることから、この図は全国重点文物保护单位となるにあたって作られた地図であろうと思われる。ただしこの図には「各墓位次尚待考訂」との注記がつけられ、検討の余地があることが示されている。この 2013 年論文の行論の中心は別の墓にあり、呂祖謙家族墓地への言及は 400 字程度と短文である。その骨子としては、呂祖謙家族墓地のもつ学術的重要性を述べ、それを受けて武義県文物部門に対し、考古学調査を行い、すみやかに墓葬の分布図や各墓の被葬者について考訂することを提案するも



写真 1 呂祖謙墓

のである。

その一方、呂祖謙家族墓地について全面的に論じた 2015 年の論文では、次のように書かれている。呂祖謙家族墓地は全国重点文物保护单位ではあるが、墓の数、分布範囲、被葬者や墓の位置などは現在まではっきりしておらず、現在修復されている（呂祖謙）墓は清代末期のもので、実際のところ、現在の調査に基づけば、この呂祖謙の墓は本物ではなく誰か別人の墓であって、呂祖謙の墓でないものを呂祖謙の墓としてたものである。ただし、呂好問、呂弼中、呂用中、呂大器については、墓誌の出土地点が明確に分かっていて墓の位置も確定している¹⁸⁾、と。

ここで墓の位置が確定しているとされる 4 人の墓のうち、2013 年論文の墓地図に記載されている 11 の墓に含まれているのは、呂好問墓と呂大器墓の 2 つしかない。つまり呂祖謙家族墓地が全国重点文物保护单位になった際に根拠となっていた被葬者の情報は、現在ほとんどすべて否定されているということになる。

鄭嘉励氏は現在の呂祖謙墓は清代末期に作られたとしているが、清代末期と特定される根拠史料は示していない。『(嘉慶)武義県志』や 1990 年刊行の『武義県志』のどちらにも墓の重修を伝える記載はない。現在の墓が後世の作為であるとするればそれはいつのことであるのか、現在のところは未詳とせざるを得ない。

鄭嘉励氏の2015年論文では、明末・崇禎年間の金華府知府であった阮元声による「明招山墳図」が引用・掲載されており、呂好問と呂祖謙の墓の位置が記されているのがみえる。この絵図によって呂祖謙の墓の位置を特定するのはおよそ不可能と思われる。ただし明末という時期にこの図が作られ、そしてその後、呂祖謙墓が新修されていくことになった背景を考察することは、呂祖謙の学術に対する評価や宋代ないし宋学に対する歴史認識の変遷を考えるにあたっての格好の素材となるように思われる。

なお、呂氏家族について気づいたことを一点記しておきたい。それは呂祖謙のむすめの名が「華年」で、呂氏一族の輩行字「年」を含んでいるということである。

滋賀『家族法』では、女性の宗への所属について「自然的」と「社会的」の両面にわけて分析されている。むすめは自然的な意味で父宗に属しており、そしてそれは結婚後も自己の生家の姓を改めないことに象徴されるが、社会的には女性は父宗には所属しない、とされた。「女性にとって社会的意味における宗への所属関係は、出生によってではなしに婚姻によって発生する。」「父宗から夫宗へ地位が移転するというよりも、むしろ婚姻によってはじめて一夫宗のうちに一地位を獲得する。」(滋賀『家族法』20頁)。しかし、むすめの名に輩行字をつけるということは、父宗のなかの尊卑長幼の序列のなかにむすめを位置づける必要があったということであり、これは社会的な意味においてむすめが宗へ所属していることのあらわれといえるのではないだろうか。その反証となるのが、呂祖謙の生まれて間もなくして亡くなった子どもたちの名である。長男の岳孫は生後兩旬で死去、次男・齊孫は生後数ヶ月で死去、次女・螺女は満一歳程度で死去した。3人ともいかにも幼名を思わせる名前であって、輩行字はつけ

られていない¹⁹⁾。ただし未成年であればおしなべて輩行字を持たないということではない。三男は呂祖謙の死去時まだやっと三歳であったが、しかしその時点で「延年」という輩行字をもつ名前を持っていた。幼児であった延年は、呂祖謙が遺した唯一の男児として、大きな社会的意味を担わされていたことを窺うことができる。幼名のみで輩行字を持たなかった者と輩行字を持つものの違いは、一族内に社会的意味を有さなかった者と有していた者の違いであるということができよう。とすれば、成長した長女の華年は社会的意味をもって父宗に所属していたと解するのが自然なのではあるまいか。そもそも滋賀『家族法』は家族法の原理の研究であり、原理にそぐわない現実が存在することは当然のことではある。しかし、呂氏は宰相を3人も輩出した名族で、なおかつ呂祖謙は高名な道学者であった。呂祖謙は「原理」を実践すべき立場にあつたし、それが現実としてできないような条件におかれていたというわけでもない。長女の命名法など何か特別の経済的負担があるような話ではないからである。滋賀『家族法』については今後も引き続き検討をしていく必要があるだろう。

兪源村古建築群

武義県に位置する古民居で、明清時代の建築群が維持されており、全国重点文物保护单位に指定されている。村内に古墓があるという情報があったことから、民居と墓との位置関係などを知れるかと思い、足を伸ばしてみることにした。実際に行ってみると、兪源村は「兪源太極星象村」との名称で観光地化されていた。本村は、朱元璋が天下を取る時のブレーンであった劉伯温(1311～1375)が、宇宙の星象の排列によって村の構造設計をしたということが強調され、村の入口には、太極図を模して川を湾曲させたという水田があ

り、太極図が描かれていた。そして井戸や溜め池が北斗七星を模して配置されている等の説明が各所にあったが、それらの一々については我々は具体的には確認していない。兪源村は兪氏の一族村で、兪氏の宗祠は大規模でかつ精巧なつくりの見事なものであり、中庭部分には演劇舞台も有していた。宗祠で門番をしていた兪氏の族人に古墓について尋ねてみたところ、墓はすべて民居地区から離れた山内にあり、見学は困難であるとのことであった。そのため先を急ぐことにし、景区内のいくつかの建築を見学するのみにとどめた。

呉絳雪烈婦祠（永康市内西城街道）

清初期の才女・呉絳雪（1650～1674）を祀る祠堂である。呉絳雪は詩集『緑華草』『六宜楼詩稿』のほか、音楽、絵画、そしてその容姿の美しさで知られていた。三藩の乱で耿精忠配下の武将・徐尚朝が、呉絳雪をさし出さなければ、永康全体を屠城すると通告し、呉絳雪はそれに応じて連行されていく途中、崖から身を投げて自殺した。道光年間、絵画で知られる安徽桐城の人・呉廷康が永康に赴任して呉絳雪を顕彰し、祠堂が建立された。

『文物地図』掲載の文物図では、烈婦祠のある近辺に廟や故居などが記載されており、歴史的な景観をとどめているかに思われたのであるが、実際に行ってみたところ、ここ周辺の一帯のほぼすべての建物は壊され、広大な地域がフェンスで囲われており、そのなかに烈婦祠だけがポツンと取り残されて存在しているような状態であった。烈婦祠は永康市の文物保護単位に指定されていることから、わずかに破壊を免れたのだと思われる。烈婦祠のところだけはフェンスに人が1人通れるだけのスペースが開けてあったが、烈婦祠にはカギがかけられ、参観は停止されていた。この一帯は大規模な再開発が行われる予定なのであろうが、しかし雑草の生え方などからして、計画が

一時的に中断しているように思われた。

陳亮墓（永康市龍山鎮橋下一村馬鋪山）

陳亮（1143～1195）。所謂事功派・永康学派の雄。

本墓は1985年に永康市重点保護文物単位に指定され、1993年に重修されている。当初はGPSに表示された馬鋪山内を搜索した。馬鋪山は近現代人の墓が多く建ち並んでいる山で、いかにもありそうに思い山内を搜索したが見つからず、引き返した。その後現地の人に場所を尋ねたところ、山内ではなく、山のふもとの村内の道路沿いに位置していたことが分かり、参観することができた。このように参拝便利な立地にあるということは、呂祖謙墓と同様に後世の作為である可能性も想定できるため、今後の検討が必要であろう。山内の探索に時間を費やしたため、陳亮墓到着時は、漆黒の闇夜となり、僅かな懐中電灯の明かりだけを頼りに参観したことから、周囲の状況などはよく分からなかった。墓石には「宋状元龍川陳公之墓」と横書きで刻まれていたのは読み取れた。

12月26日 天台山

天台山は、天台智者大師智顛（538～597）が天台宗を開いた地であり、爾来天台宗の根本道場となった。現在、13の風景区に多数の仏教寺院が所在する。今回は時間の関係上、3箇所寺院のみ参観した。

真覚寺（智者塔院）

智者大師智顛が新昌県石城寺で入寂し、その遺骸を弟子たちが帰葬した寺である。唐代には「定慧真身塔院」とよばれ、宋代大中祥符元年（1008）に真覚寺と改称した。祖殿内には、石製で高さ七メートル、六角三層の宝塔「智者肉身塔」があり、ここの塔内に智顛の真身があるとされる。また、真覚寺に到着するまでの坂道に、以下の三基の墓塔がある。

- 1 「唐結集宗教章安尊者総持灌頂大師之塔」
章安灌頂（561～632）は、天台宗第二祖で、国清寺の創建者。
- 2 「唐天台記主荊溪尊者湛然大師之塔」
荊溪湛然（711～782）は、天台宗第九世祖で、唐の中期、天台山仏教の中興の祖。
- 3 「明傳持教幽溪傳燈法師之塔」
幽溪伝灯（1554～1627）は、天台三十祖。明代の天台山仏教の中興の祖。
塔墓という語から、石造の塔を想像していたが、実際は傾斜地を利用した土盛の墳墓に石碑という形式であった。また真覚寺の「智者肉身塔」という名称も、火葬でないような語感をもつ。

高明寺



写真2 高明寺地藏殿・前庭

※祖先供養儀礼の1コマ。写真の左手に地藏殿がある。先頭から3人目の人物が施主で、赤色の位牌を持っている。

智顛が開創した天台山十二古刹の1つで、明の万暦年間に幽溪伝灯法師が住持し、高明講寺と称し、再興した。大雄宝殿や明代の鐘楼などを有する。我々の関心を特に引いたのは地藏殿で、地藏殿の地下が、信徒の祖先供養儀礼の場として用いられ、多数の位牌が納められていた。1つの位牌に1人だけの名を記したもの、父母2人の名を記したもの、父母に加え継父の名も記しているもの

など、様々なスタイルがあることがみてとれた。また我々が参観したときは、折良くまさに祖先供養儀礼が行われているところで、施主とそして多くの僧徒が集い、地藏殿の地下や前庭で誦経し供養儀礼を行うさまを実見することができた。



写真3 高明寺地藏殿地階一角の位牌

※地藏殿地階が祖先供養祭祀儀礼の主会場である。中央に仏像が安置され、四方の壁面にはぐるりと多くの位牌がおかれている。

国清寺

智顛の遺旨をうけて晋王楊広（のちの隋の煬帝）が、開皇18年（598）に創建。天台山の中心となる寺である。伝教大師最澄が天台の教えを受けたのも本寺であった。

国清寺境内には、一行禅師（673～727）の墓塔がある。一行禅師は天体観測や子午線測量を行い、『開元大衍曆』五十二巻を作成したことで知られる人物である。寺内の参観図に一行禅師墓塔の記載はなく、探索しても不明で、あきらめて引き返し、門から出たところ、門前に立ち並ぶ過去七仏の供養塔のすぐ後ろに、「唐一行禅師之塔」と書かれた石製の墓塔があることに気づいた。

仏教城

国清寺に行く途中の市街域に、多量の仏像で飾られた巨大な建物があるのに気づき、いったいあ

れは何かと尋ねると「仏教城」という答えが返ってきた。ここは仏像製作会社の工場で、工場では仏像を製作しているほか、製作された仏像が展示されているとのことである。仏像製作現場を見られるというのなかなかない機会であろうと思い、入場料も払って入館したところ、見学できるのは展示部分だけで、製作現場については未公開だった。とはいえ、体育館のような広さのフロアに驚くばかりの大量の仏像がひしめいて居並んでいる光景は我々を心底驚愕させた。ビル5階建てに相当する高さをもつ大仏の展示もあった。仏像だけでなく、道教神や孔子と弟子の像もあったが、ジェンダー史の見地からは、尼僧像のシリーズがとりわけ興味深かった。尼僧が信仰の対象となり像がつくられるという文化があるということはここで初めて知ったことである。

12月27日 寧波

明州市舶司・来遠駅遺址

当初の参観予定ではなかったが、当日朝にチャーターしていた車が故障し、代車が来るまでのロスタイムを活用して、ホテルから比較的近かった当該史跡を参観した。市舶司(務)遺址として『文物地図』に記載のあった江夏街道東渡路29号に行ってみたところ、現代的なビルが建っていただけだった。ただし、この地は奉化江から道一本西に入ったところで、場所的にはそれらしく感じられた。史跡を示す表示等はないか付近を探したが、それらしきものはなかった。ただよく探すと、往事の寧波が外国船の行き交う国際都市であったことを解説するレリーフが、植え込みに埋没するようなかたちでわずかに設けられていた。

奉化江の岸辺に出ると、来遠亭を記念するオブジェ風の建物があり、そのなかには書籍の形にかたどられた「来遠亭遺址碑」があった。2011年立碑。この奉化江河岸のすぐ北が余姚江・甬江との

三江合流地点・「三江口」であり、甬江は東シナ海に通じる。寧波が河川水運の要衝であることを実感する。三江口の余姚江側には船を模した形状の「道元禪師入宋紀念碑」が建てられていた。

東銭湖墓葬群

東銭湖墓葬群とは、東銭湖の西側に点在する四明史氏の墓葬である。墓それ自体はすでに盗掘等によりほぼ損壊しているが、墓道の石刻一文臣・武将・虎・羊など一はよく保存されているものもいくつかあり、それらは東銭湖石刻群として全国重点文物保护单位に指定されている。

四明史氏は南宋代、史浩・史彌遠・史嵩之と三人の宰相を輩出した名族であり、リチャード L. デービス氏の研究をはじめとして多くの研究が蓄積されてきた²⁰⁾。本墓葬群については中国はもちろんのこと、日本でも寧波プロジェクトによって調査研究が進められている。我々は蔡罕氏、岡元司氏らによる研究²¹⁾を参考にしながら、葉氏太君墓、史詔墓、史浩墓、史仲師墓、史漸墓、史彌遠墓の最終的に六カ所の墓を参観し、それらを家族史・ジェンダー史的な見地から考察を試みることにした。なお一つ一つの墓を現地の人に尋ねながら探し当てるのはなかなか大変なことであった。ドライバーが寧波人で、当地の人の訛の強い言葉を聴き取れるという条件がなければ、わずか半日程度で六箇所も墓を回るのは到底不可能だっただろうと思われる。なお、地元の人に墓のありかを尋ねると、自分も史姓で子孫だという人に多く出会ったのは印象的だった。墓の探索中、昼食をとったのも、「史家菜館」という看板を掲げた史姓の人の店であった。

① 葉氏太君墓 (下水郷長楽里山)

三つの墳頂をもつ特徴的な形状をした墳墓である。東銭湖石刻群の一としての史跡名称は「葉

氏太君墓道」であり、民国二十四年（1935）に立てられた墓碑にも「冀国夫人葉氏太君墓」としか書かれていないが、しかし前述の蔡罕氏の研究によれば、これは3人の合葬墓である。中央に葉氏（1032～1117）、右に葉氏の夫・史簡の木像が葬られ、左に葉氏の孫の史才（1083～1162）が葬られている。史才は1118年に進士登第、官途を歩み、端明殿学士・簽書枢密院事兼參知政事にまでのぼって、史氏一族の繁栄の道を開いた。

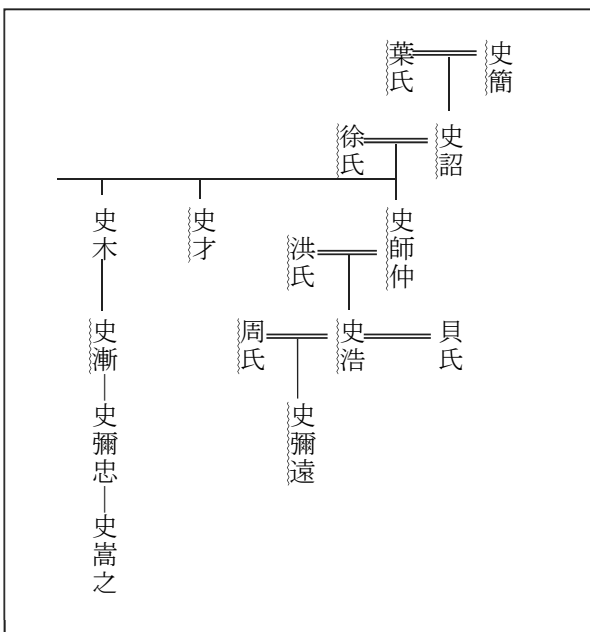


図2 史氏略系図

※波線の人物が今回の調査対象とした墓である



写真4 葉氏太君墓（三つの墳頂をもつ）

祖父母と孫息子との3人という合葬のされ方は稀で興味深い。そして3人のうち、妻の墓が中央で墳丘が最も大きいこと、また3人の合葬墓で

あるのにもかかわらず、あくまで「葉氏太君墓」という名称で、ほぼ葉氏のみが記念され続けているのも、なかなか興味深い合葬形態である。

このような合葬墓がつくられた経緯についても、やはり蔡罕氏が明らかにしている。蔡罕氏によれば、葉氏の夫である史簡は、葉氏が25歳の時に早世し、その時点では別所で火葬された。史簡の死去後葉氏は遺腹の子史詔を産み育てた。85歳で葉氏が亡くなり、墓を作り埋葬するさい、墓を作った子の史詔が史簡の像を造って葉氏の隣に附葬した。孫の史才は先述したとおり史氏で初めて高官に登った人物であるが、1154年秦檜に逆らって罷免され、1162年に死去し、祖母に附葬された、とのことである。

滋賀『家族法』との関係でいえば、この葉氏太君墓は夫婦合葬原則が守られていない事例といえる。もし夫婦合葬が原則なのであれば、葉氏を「別所」にて史簡と合葬しなければならなかった。ところがそれはせず、葉氏にだけすばらしい立地に墓を作り土葬にし、かつ史簡の遺骨を遷葬せずに木像で代替させている。さらに孫の史才は、高官に登り史氏の栄華の道を開いた人物であるが、妻とは合葬されず、顕彰の中心である祖母の墓の傍らでまるで存在を消すかのように葬られている。

そして現実にこのような合葬方法が取られたのもそれなりの理由があったように思われる。

葉氏の夫・史簡は、地方衙門に勤務する胥吏か衙役であった可能性が推察される人物で²²⁾、また火葬されたということからみても死去の時点においては貧困であったと考えられる。そのような境遇のなかから家を守り、遺児を訓育して文学徳業をもって地域に知られる存在に育てたのもひとえに葉氏の方であったに相違なく、そして葉氏が没したのは、孫の史才が進士に登第する前年であった。つまり葉氏は長年に亘り史家の家長とし

てその基盤を築き、そしてその死の直後から史家は栄華の道を歩みはじめたことになる。葉氏は史家にとってまことに特別な存在であったに相違なく、葉氏の墓の保護維持については他の墓とは異なり並々ならぬ関心が注がれてきた。本墓には隣接して、無量寿庵という寺が墳寺として存在し、史簡と葉氏、子の史詔と徐氏が祀られ、南宋以後損壊と修築を繰り返しながら廃絶せずに現在に至っている。葉氏墓は、建炎三年（1129）の金軍侵攻に伴い、志銘碑石が破壊されたのを、史彌忠が1206年に再び墓誌を立てている。さらに墓付近には民国二十五年（1936）の重修碑も立てられていた。東銭湖墓群のなかで、ごく最近に行われた整備を除いた重修碑をもち、かつ整備された墳塚をもっていたのは葉氏太君墓ただ一つである。その一方、合葬された史才は、史家繁栄の道を開いた人物であるが、埋葬時は時の権力者秦檜との関係からごく密やかに葬ることが必要だったのであろう。しかし、顕彰の最大の対象である葉氏の墓側であることから現実的には祭祀を続けることができるため、葬地として現実的な選択であったと考えられる。ただしこういった措置は夫婦を別葬にすることが特に問題ないからこそできることである。そして、いったん火葬された史簡の遺骨はその後なぜ葉氏墓に遷葬されなかったのか、木像で代替されたのは何故かについてはさらに検討が必要であらう。

②史詔墓（下水西村緑野畧響鈴山）

史詔（1057～1129）は葉氏太君の子。徳行で知られ官にも推挙されたが、母を奉じて仕官しなかった。墓道の羊・虎・文臣・武将・椅子といった石刻は良く保存されていたが、墓の墓碑は史詔の名が書かれた部分と覚しき部分のみ壊され、徐氏夫人の名が書かれた断片のみ残り墓前に立てられていた。蔡罕氏によれば、徐氏夫人とは同墓異穴とのことである。なぜ夫婦を同穴とせず異穴

とするのか、その意義については、後考を俟つ。



写真5 史浩墓

③史浩墓（横街村安楽山烏竹坪）

史浩（1106～1194）は南宋の宰相であるが、この墓を探し当てるのにはかなり苦労した。結果的には、付近の道路の通行管理をしていた人に尋ねてみたところ、この方が史氏の五十数代目の子孫にあたる史春耀さん（52歳）という方で、墓に案内していただくことが出来た。史春耀さんの勤務する道路管理番小屋の対面側には、断裂した亀趺や石碑の断片が散らばっていたが、これが史浩墓の神道碑にあたる。そして番小屋のすぐ後ろの道から鬱蒼とした孟宗竹林に入ってしばらく行ったところに史浩墓はあった。ただ、墓は破壊され、わずかに残る石積などからそれと知るほかない状態であった。蔡罕氏によれば史浩墓の墓穴は四あるということであるが²³⁾、外見上まったく判別はつかなかった。

④史師仲墓（横街村安楽山烏竹坪）

史師仲（1082～1124）は史詔の長子で史浩の父である。上述の史春耀さんに史浩墓を案内していただいたおり、ごく近くの地点に案内され、“ここが史浩のお母さんの墓”と教えていただいたのであるが、蔡罕氏や楊古城・龔国榮両氏の研究によれば²⁴⁾、これは父母、つまり史師仲と洪氏の夫婦合葬墓である。両親の墓であるのに現地では「母親の墓」としか認識されていなかったというのも、興味深い話である。史師仲墓もごくわずか

な石積以外に何も残ってはいなかったが、史春耀さんのお話によれば、この墓の墓道には以前は武人などの石刻があったが、南宋石刻公園をつくる際にここにあった石刻は石刻公園に運ばれてしまっていて、今は何もなくなったとのことであり、かつてここに石刻があったときに撮った写真も見せて下さった。

⑤史漸墓（上水山黄梅山、南宋石刻公園）

史漸（1124～1194）は史才の子で、故郷で教育活動に従事し、七人の子のうち五人が進士となった。宰相史嵩之の祖父にあたる。史漸墓の墓道には大きく精緻な石刻が並んでいた。ただし墓自体は損壊している。南宋石刻公園は史漸墓を中心に作られ、広大な面積に史漸墓と南宋石刻博物館があり、その他屋外展示でも多くの石刻を見ることができる。

⑥史彌遠墓（大慈山）

史彌遠（1164～1233）は、20年近くに亘って専権を握った南宋の宰相である。さすがに著名人であるためか、史彌遠について解説する案内板も設けられていた。墓道には石獸・石像が並び立ち、その先には祠堂が設けられていた。ただし墓があるであろう祠堂の先はまったくの藪となっていた。周囲にとりつけられている監視カメラの方向などを手がかりに藪を分け入り、墳丘の頂点あたりを確認したに止まる。石碑の断片などは見つか



写真 6 史彌遠墓

らなかった。

なお、史彌遠墓と隣接地に大慈禅寺という寺がある。寺内の解説板によれば、創建は五代後晋であるが、史彌遠がこの地に母を葬ったことから、この地が大慈山と呼ばれるようになり、史彌遠は本寺を史氏の功德寺としたとあった²⁵⁾。つまり史彌遠は、母周氏を父史浩と合葬せず、母を単葬し、かつ母の墓の近くに自らの墓を設けたことになる。母と息子関係の強さを表す墓葬のありかたの一例といえよう。史彌遠の母周氏の墓は探したが見つけることはできなかった。しかし楊古城・龔国榮両氏による『南宋石彫』²⁶⁾には、もと周氏の墓の墓道にあり、のちに南宋石刻博物館に移入されたという石像の武人や石馬の写真が掲載されている。

おわりに

東銭湖墓葬群の六箇所の古墓を回って実感したのは、「墓葬群」というにははばかれるほど、一つ一つの墓が遠く離れていることであった。冒頭掲載の行程表をみていただくと分かる通り、墓から墓への移動に自動車でも20～30分かかっている。折々に現地の人に道を尋ねながらであり時間がかかっているとはいえ、宋代当時徒歩等で移動していたことを考えれば、やはり一体の地というにはあまりにも遠いといわざるを得ない。もちろん史浩墓―史師仲墓のように墓が近接している場合もあったが、史浩墓がある吉祥安樂山は、皇帝高宗から御賜された家山であり²⁷⁾、一家の墓葬が多くあって当然である。しかし史浩の子・史彌遠は吉祥安樂山に自らの母を葬らず、自らもこの地には入らなかった。その理由は、安樂山に土地がなかったということではない。なぜなら遠より後の世代の子孫で安樂山に葬られている者も数多いからである。つまりは史彌遠は自らの好むように母と自らの墓を作り、そしてそれで何も問

題なかったのであろう。つまり、名族史氏といえども、ことさらに一族墓地を作るという観念はなかったと思われる。

滋賀『家族法』は、家族成員個々の財産権と祭祀権を一体のものとして家族法を論じているのが特徴であるが、墓葬については「代々の土墳は順序正しく相接して築かれ、おのずから土墳の群がる一面を形成する。これが祖墳であり、祖墳には夫婦そろって葬られることを原則とする」(375頁)と述べられている。我々がこれまで調査してきた福建・江西・浙江の宋代古墓では夫婦でさえ別葬にすることが多く、このようにつくられた墓地は見たことがない。南方ではきわめて稀な一族葬を行っている呂祖謙と家族墓ですら、現時点においては「代々の土墳は順序正しく相接して築かれ」ているかどうかは不明であった。滋賀氏が論

述の根拠としたのは北方に限られた習俗だったのではないだろうか。帝政中国二千年に亘る不変の家族原理として提起されてきた滋賀氏による中国家族法の原理を、歴史的に変化してきたものとしてとらえなおす必要性は筆者がこれまでしばしば述べてきたところであるが²⁸⁾、このような滋賀原理の歴史化の試みとともに、地域的にも変化のあるものとしてとらえなおす地域化の試みも今後必要であると考ええる。

【謝辞】本研究は、JSPS 科研費 JP17H04525 および JP17H02246 の助成をうけた。

(ささき めぐみ：島根大学法文学部教授)

- 1) これら調査目的の詳細は、九月に実施した江西省での古墓調査報告書においてすでに記しており、そちらをご覧いただきたい。佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之「江西省歴史調査報告：宋代古墓を中心として(吉安・撫州篇)」『社会文化論集』(島根大学法文学部社会文化学科紀要)14号、2018年。
- 2) 国家文物局主編『中国文物地図集・浙江分冊』文物出版社、2009年。
- 3) 滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社、1967年。
- 4) 註1 前掲報告書および拙論「墓からみた伝統中国の家族：宋代道学者がつくった墓」『社会文化論集』11、2015年、同「むすめの墓・母の墓：墓からみた伝統中国の家族」『アジア遊学』191、2015年参照。
- 5) その後2013年に「潘希曾墓」として武義県文物保護単位に指定されている。
- 6) 周関河「武義文物古跡享受“改革成果”」『金華日報』2008年1月6日。
- 7) たとえば、浙江省武義政協文史資料委員会編『呂祖謙与浙東明招文化』社会科学文献出版社、2006年参照。本書で明招文化として語られるのは呂祖謙である。阮孚については、明招寺が呂祖謙の殯の地であったことと阮孚のもと隠居所であったことが重ねあわされて「隱遁文化」としてわずかに想起されるものの、徳講禪師についてはまったく触れられていない。
- 8) 墳寺については、竺沙雅章『中国仏教社会史研究』増訂版、同朋社、1982年、第三章「宋代墳寺考」(初出1979年)参照。
- 9) 河南呂氏一族については、衣川強『宋代官僚社会史研究』汲古書院、2006年、第二章「宋代の名族：河南呂氏の場合」(初出1973年)参照。
- 10) 註9前掲衣川論文に基づき作成。衣川論文掲載の系図は、註11所掲の鄭嘉励論文掲載の系図とは一部異なっている。
- 11) 鄭嘉励「武義明招山：一場理想主義者の族葬」『浙江新聞』2015年8月11日<<https://zj.zjol.com.cn/news/135962.html>>(2018年3月2日確認)なおこの96人という被葬者数は、明末の金華知府・阮元声による「明招山墳図」『宋東萊呂成公外録』(筆者未見)にもとづく数である。『文物地図』によれば、現在、実際に確認できる墓は10数基のようである。
- 12) 註4前掲報告書・論文、および大澤正昭・佐々木愛・戸田裕司「第二次江西北部歴史調査報告：『清明集』的世界の地理的環境と文化的背景(婺源県・浮梁県篇)」『上智史学』60号、2015年。
- 13) 洛陽市第二文物工作隊『富弼家族墓地』中州古籍出版社、2009年、金連玉「試論北宋相州韓氏家族墓地的墓葬位序与喪葬理念」『故宮博物院院刊』総177期(2015年第1期)、張蕙「藍田墓地与北宋藏家呂大臨的考古図」『美成在久』2016年1期。張蕙「陝西藍田北宋呂氏家族墓園考古：北宋金石学家的長眠之地」『大衆考古』2015年第2期。

- 14) 鄭嘉励によれば、家族墓というものは埋葬については厳格な規格と墳図を併せ持つものであり、鄭州神崧の呂氏家族墓地にもかつて墳図があったがその後失われてしまい、ただ墳図の序のみが天一閣にある『呂氏宗譜』のなかに掲載されているとのことである。註 11 前掲鄭嘉励論文。
- 15) 本段落で述べている呂氏家族の明招山墓地への遷葬については、註 11 前掲鄭嘉励論文を参照。
- 16) 鄭嘉励「從南宋徐謂礼墓到呂祖謙家族墓地：讀徐謂礼墓札記」『東方博物』46 輯、2013 年第 1 期。
- 17) 註 11 前掲鄭嘉励論文。
- 18) 『文物地図』では特定できると書かれていた呂祖儉墓について、鄭嘉励氏は墓誌が出土しているので明招山に葬られたことは明らかであるということ述べておき、墓誌出土の位置から墓の位置が特定できるグループには入れていない。呂祖儉墓と同様の状況にある墓として呂祖烈、呂康年をあげている。後者のグループは、1950～60 年代の破壊の時期に明招山で生産建設がおこなわれた際、墓誌が出土したとのことである。確かに時代状況を考えれば、出土に併せて調査や記録がされたようには思われない。また『文物地図』で特定できると記載していた呂本中墓は、鄭嘉励氏によれば特定できないことになる。
- 19) 呂祖謙の子どもたちについては、『東萊呂太史文集附録』巻一、年譜を参照。なお、螺女の母の名は螺である。
- 20) Richard L. Davis, *Court and family in Sung China, 960-1279: bureaucratic success and kinship fortunes for the Shih of Ming-chou*, Duke University press, 1986. また四明史氏の研究動向紹介として、夏令偉「四十年来南宋四明史氏家族研究綜述」『中共寧波市委党校学報』2017 年第 5 期があり、多くの研究を紹介して有用であった。
- 21) 蔡罕（岡元司解題・訳）「宋代四明史氏墓葬遺跡について」『宋一明宗族の研究』汲古書院、2005 年、岡元司「宋代明州の史氏一族と東錢湖墓群」、東アジア美術文化交流研究会編『寧波の美術と海域交流』、中国書店、2009 年所収。
- 22) 南宋代の史料『宝慶四明志』巻九掲載の葉氏列伝で、史簡については「鄞邑史簡」とあるだけであり、葉氏の功績だけが熱く顕彰される一方、史簡については無関心といえる。ところが元代に編纂された『延祐四明志』巻五掲載の葉氏の列伝には、史簡は県衙門で罪人に杖刑を施す担当者として登場し、県尉が賄賂をうけては平民を杖刑にすることに反抗し、それによって命を落とした気概ある正義の人として描かれる。さらに清代に至ると、全祖望は史料的根拠もないまま史簡は地域の文人であるとした。史簡像の変容については註 20 前掲 Davis 氏の研究を参照。南宋以降清代に至るまでのこの史簡像の変化は、宋代以後の中国史における父系制の強化を映し出しているといえるのかもしれない。
- 23) 註 21 前掲蔡罕論文。
- 24) 註 21 前掲蔡罕論文、および楊古城・龔国栄『南宋石彫』寧波出版社、2006 年。
- 25) 四明史氏と仏教・墳寺の関係については、黄敏枝「南宋四明史氏家族与仏教的關係」漆侠主編『宋史研究論文集：國際宋史研討会暨中国宋史研究会第九届年会編刊』河北大学出版社、2002 年、参照。本論文によれば、史彌遠は大慈山に 7 か所もの墳寺・墳觀（悟空十方律院、教忠報国禅寺、妙智禅院、宝華教寺、辯利教寺、大慈禅寺、大中祥符甲乙律院、顯忠旌德觀、青修悟真觀、太清悟真成道宮）を建造し、その後朝廷に寺額を申請している。大慈禅寺には『延祐四明志』十七巻に「大慈禅寺、県東六十里、宋嘉定十三年史丞相彌遠創立為功德寺」とあり、史彌遠が創建者となっており、寺内の揭示版に五代後晋の創建とあったこととは些か食い違ふ。
- 26) 註 24 前掲楊古城・龔国栄『南宋石彫』。
- 27) 註 21 前掲蔡罕論文。
- 28) 註 10 前掲の拙論および同「伝統家族イデオロギーと朱子学」小浜正子ほか編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会、2018 年。